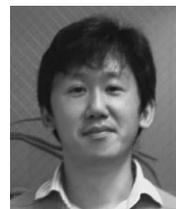


## 新生「西はりま天文台」

伊藤 洋一

〈兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 天文科学センター  
〒679-5313 兵庫県佐用郡佐用町西河内 407-2〉  
e-mail: yitoh@nhao.jp



兵庫県のはずれにある「西はりま天文台」は、口径2 mの「なゆた望遠鏡」をもつ公開天文台です。森本さんや黒田さんといった超個人的な人々が引っ張ってきたので、どなたも一度はうわさ話を聞いたことがあるのではないのでしょうか。ここでは、新入りの私が西はりま天文台の日常とこれからについて紹介したいと思います。

### 1. 西はりま天文台の誕生

「おじさんはねえ」。西はりま天文台といえば、このセリフを思い起こす人が多いのではないのでしょうか。西はりま天文台は22年前に誕生し、オジサンこと森本雅樹さんが長く園長を勤められました。私はオジサンと初めて会ったときのことを今でも覚えています。その頃、私が所属した大学院では、修士1年にいろいろな研究室を訪問してから、自分のテーマを決めていました。国立天文台のVSOPグループのゼミに参加したときのことです。ニコニコとしたおじさんが「今度、この園長さんになるんだよ。遊びに来てね」と言って「大撫山キラキラランド」という文字の入ったテレフォンカードをくれました（写真1）。この「キラキラランド」こそが西はりま天文台のことだったのでした。

西はりま天文台は、森本雅樹さん、黒田武彦さんという際立って個性のある二人の明確なリーダーシップのもとに運営が続けられました。天文台は、兵庫県の労政福祉事業の一環として整備された天文台公園の中心施設という位置づけです。天文台建設当初の主力機器は口径60 cmの反射望遠鏡でした（写真2）。現在では、口径60 cmの望

遠鏡はともすると「小口径望遠鏡」に分類されてしまいましたが、その当時は公開天文台として最大口径の本格的な望遠鏡でした。2004年には口径2 mの「なゆた望遠鏡」が完成しました（写真3, 4）。この望遠鏡は現在でも「日本で最大口径の光学望遠鏡」です。そのほかにも、家族用ロッジ（定員5名の部屋が6室、1泊1室8,000円程度）、団体用ロッジ（定員20名の部屋が6室）、食堂、小型望遠鏡ドーム、バーベキュー施設などが、甲子園球場6個に相当する広大な敷地の中にあります。

西はりま天文台は、このように順調に設備を整えてきました。これも兵庫県民をはじめ多くの皆



写真1 オジサンから20年前にもらった「大撫山キラキラランド」のテレフォンカード。僕はなんて物持ちがいいのだろう。

様のご理解があってこそのことだと思います。

## 2. 西はりま天文台の日常

西はりま天文台の第一義的な存在意義は「天文学を一般社会に普及すること」です。そこで、さまざまな人的活動を行っています。それは、地元の佐用町をはじめとする中学高校での出前授業や、兵庫県の小学生の林間学校（自然学校と言います）、兵庫県をはじめとする各地での講演会、「スターダスト号」という天文台の公用車を使った「星の出前」観望会などです（スターダスト号には「ほしまる」というキャラクターが大きく描かれていて、ぼくはまだ乗るのが恥ずかしいです）。おかげさまで年間9万人ほどのお客様が天文台公園に足を運んでくださっています。また700名以上からなる「友の会」というサポーター組織があることも大きな特徴でしょう。友の会では、西はりま天文台で会合を行ったり、観望会を催したりしています。なかにはボランティアとして天文台の運営に携わっていただく方までいらっしゃいます。

最も重要な普及活動は、「なゆた望遠鏡」を使った観望会でしょう。天文台公園に宿泊した方には毎晩、午後7時半から9時まで観望会を行っています（宿泊されない方は土日のみ）。西はり

ま天文台に来るお客さんは贅沢だなあ、と思います。2mの望遠鏡を使って天体の生の姿を目に焼きつけることができるのですから。例えば球状星団や散開星団は星の一つひとつがはっきりと分離でき、目に刺さるかのようです。なゆたで見る月は、そのクレーターが作る起伏が手に取るようで、「スターダスト号」を使えばその地に到着できそうな気がします。ぼくが最も好きな天体はベガです。その青白い光は強烈で、あたかも暗い部屋にポツンと灯るLEDライトのようです。ベガをアイピース越しに観察している人は、ベガの光に照らされ目の周りが明るく輝きます。このように、「なゆた望遠鏡」で見る天体は格別です。しかし、お客さんの中にはそう思っていない人もいます。例えば「望遠鏡で星を見るのが初めて」という人も数多く、そういう人にとっては「なゆた」で見る鮮やかな天体の姿が当たり前なのかもしれません。なんて贅沢なことでしょう。

このほかにも、60cm望遠鏡を使った「昼間の星の観望会」や、いわゆる「星のソムリエ事業」である「はりま宇宙講座」の開催、佐用町ケーブルテレビの番組「キラキラチャンネル」の制作、宿泊者への小型望遠鏡の貸出し、公園の施設見学など、さまざまな日常業務をこなしています。

このように、西はりま天文台は公開天文台として一般社会への普及事業に力を入れてきました。しかしながら問題も抱えています。一つは2m望遠鏡を研究面で十分に活かしてきたとは言えないことです。上に述べたように、西はりま天文台の行う普及活動は多岐にわたります。そのうちの多くは昼間に行うものです。こうした活動に時間を奪われ、徐々に研究のアクティビティーが低下したことは否めません。こうした研究の停滞から、ついには観測装置が不調になってもそのまま放置されるという状況になってしまいました。もう一つは、出前授業などを行った学生の中で、大学で天文学を専攻する人がなかなか現れないことです。西はりま天文台の近くには、優秀な学生が集



写真2 西はりま天文台北館の前で、神戸大学の学生たちと。60cm望遠鏡はこの茶色い建物の上にあります。



写真3 天文台南館の全景。銀色のドームの中に「なゆた望遠鏡」が入っています。ドームの形は「すばる望遠鏡」のドームと似ていますね。

まると言われている兵庫県立大学附属中学校・高等学校があります。この学校とは何年にもわたって協力体制を組み、出前授業なども行ってきました。そのおかげで天文学に興味をもつ学生も少なからずいると聞きます。天文学会のジュニアセッションでこの学校の生徒の発表を聞いた方もいらっしゃることでしょう。しかしながら関西圏といえども天文学を学べる大学はごく限られています。

### 3. 西はりま天文台のこれから

この4月に、西はりま天文台には大きな変革が訪れました。それは「天文台を兵庫県立大学に移管する」ということです。4月以降の正式名称は「兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 天文科学センター」というものです。なんだか長ったらしい気もしますし、今までの「西はりま天文台」という名称がなくなってしまったので、現場ではいまだに混乱が生じています。それまでにも天文台スタッフのうち3名は、兵庫県立大学の環境人間学部や工学部で講義を行っていました。しかしながら、研究室を作り学生を指導するということはできませんでした。今後は大学と密接に連携し、学部の教育や卒業研究の指導、大学院生との共同研究を盛んにしたいと思います。このことによって、研究の停滞と教育の断絶という二つの問

題を解決したいと考えています。

研究活動は徐々に復活しつつあります。昨年度から大学間連携事業に参加し、いくつかの天体については観測を行いました。また今まで不調が続いていた可視撮像装置MINTと可視分光装置MALLSも改修のめどがたちました。さらに、近赤外線カメラNICも立ち上がりつつあります。近い将来には、共同研究をベースとして皆さんと成果を上げていきたいと考えています。

4月からは筆者が西はりま天文台の一員になりました。肩書は「天文科学センター長」というもので、天文台を束ねていかねばなりません。オジサンや黒田さんといった歴代の園長のような強烈な個性や強力なリーダーシップは持ち合わせていませんが、天文学の発展と普及に微力を尽くしていきたいと考えています。

まだ異動して間もないことから、上に書いたことには私の誤認や偏見があるかもしれません。日々、町に住むお年寄りの多さに唖然とし、播磨西部の方言（関西弁+岡山弁）を聞き取ることに苦労し（国立天文台岡山天体物理観測所へ行くバスの運転手さんとの会話は難しかったですね）、荒っぽい運転に鍛えられ（播州走りと言うそうです）、夜道に現れるシカにおびえながら（神戸大



写真4 「なゆた望遠鏡」の前で学生たちと。一番左は高橋研究員。望遠鏡も「すばる」と似ています。同じ工場で作ったからでしょうか。大気揺らぎを減らすため、ドーム内は冬でも冷房が効いていて、かなり寒いです。

学に出没するイノシシのほうが意思疎通ができたような気がします), 一步一步前へ進んでいく決意です。

## 付記その1. 森 淳君のこと

森君は大学院時代の同級生です。修士課程では、国立天文台の山下卓也さんに師事し、岡山天体物理観測所の赤外線カメラOASISの開発などを精力的に行っていました。その後、博士課程在学中に西はりま天文台に研究員として異動し、教育普及活動に力を注ぎました。実際に彼と接したことのある人ならばすぐにわかることですが、彼は楽しい人間で、というか口達者で、というかもっと言うとお調子者で、常に人の輪の中心にいるような存在でした。一方で、ちょっと古風なところもあって、何かトラブルがあったときでも議論をしてお互いの意見をぶつけければ良い解決策が見つかるという信念を強くもっていたように思います。西はりま天文台に移ってからは、彗星のスペクトルデータベースを作ろうと努力をしていました。しかしながら、2007年5月に突然倒れてしまい、戻ってくることはありませんでした。西は

りま天文台の研究員室と望遠鏡制御室には今も彼の写真が飾ってあります。いつまでも36歳の彼の写真を見るたびに、「彼の理想をほんのわずかであっても実現しよう」との思いを強くします。生きていれば、ぼくよりもずっと「西はりま天文台」のトップにふさわしい人でした。

## 付記その2. 黒田園長のこと

黒田さんが、この1月に脳梗塞で倒れてしまいました。2度目の発症で、発見まで時間がかかったこともあり、一時は命が危険な状態にまでなっていました。幸いにも一命は取り留め、現在は姫路市の病院で懸命のリハビリを続けています。4月中旬の時点では、人の言っていることは理解できるようですが、自分の考えを伝えることはまだ難しい状態です。本人は言いたいことがたくさんあるみたいで、ずいぶんともどかしい思いをしている様子です。しかしながら、その回復力は、さすがあの黒田さんらしく、驚異的なものようです。一日でも早く健康を取り戻し、再び西はりま天文台にいらしていただきたいと願っています。